

有明海漁業実態調査

ウミタケ浮遊幼生調査

野田進治・佃 政則

有明海佐賀県海域におけるウミタケ資源の動態を把握するため、ウミタケ浮遊幼生調査を行ったので概要を報告する。

方 法

ウミタケ浮遊幼生調査は、令和4年10月11日～12月1日の間に6回、満潮の前後3時間内に図1に示した2定点で実施した。

各定点で北原式定量プランクトンネットを一部改良した目合60 μ m、口径46cmの上部キャンバスがない金属アイマー付きのネットを用いて、海底から表層まで鉛直曳きを行った。濾水後の試料は、250mLポリ瓶に回収し、グルタルアルデヒドで固定して室内に持ち帰り、試料の10分の1量を検鏡し、ウミタケ浮遊幼生の個体数及び殻長を測定した。なお、130 μ m以下は他の2枚貝幼生と判別がつきにくいため、測定個体数には含めなかった。

結 果

表1に調査日と調査地点におけるプランクトンネットの曳網距離を示す。また、図2に調査定点別ウミタケ浮遊幼生の出現個体数の推移を示す。

St.1（早津江沖）、St.2（白石沖）のいずれの地点でも10月11日から10月31日までのアゲマキ浮遊幼生の出現個体数は比較的低位で推移していたが、11月7日には急激に増加し、12月1日には減少傾向となった。このように、今年度のウミタケ浮遊幼生の出現個体数が多い時期は11月上旬であった。

今年度の各定点における最大出現個体数は、St.1で187個体/m³、St.2で142個体/m³と、前年度の最大出現個体数である67～79個体/m³、及び令和2年度の最大出現個体数である83～161個体/m³と比較すると多かったが、令和元年度である184～235個体/m³と比較すると減少していた。

図3に調査日別殻長頻度組成を示す。複数のモードがみられたことから、産卵期間に幅があり、数回の産卵に起因することが伺えた。

文 献

- 1) 野田進治・佃政則(2019)；ウミタケ等適正生息環境調査（ウミタケ浮遊幼生調査），令和元年度佐賀県有明水産振興センター業務報告，p39-40.
- 2) 野田進治・重久剛佑・佃政則(2021)；ウミタケ等適正生息環境調査（ウミタケ浮遊幼生調査），令和2年度佐賀県有明水産振興センター業務報告，p30-31.
- 2) 野田進治・佃政則(2022)；ウミタケ等適正生息環境調査（ウミタケ浮遊幼生調査），令和3年度佐賀県有明水産振興センター業務報告，p28-29.

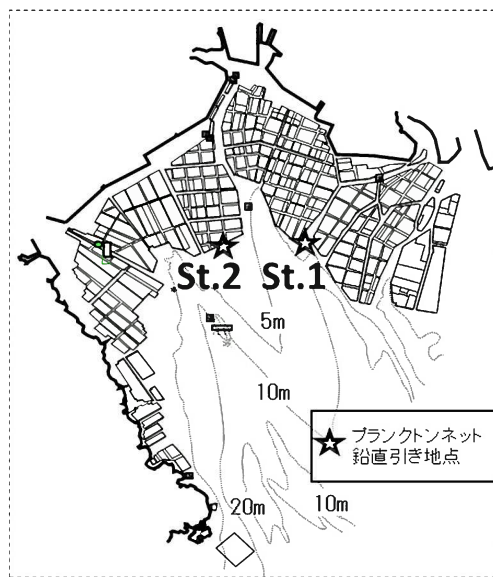


図1 ウミタケ浮遊幼生調査定点

表1 調査日と調査地点におけるプランクトンネットの曳網距離（m）

	St.1	St.2
10月11日	8.1	5.4
10月17日	5	4.2
10月24日	5	5
10月31日	7.9	5.1
11月7日	8.7	5.5
12月1日	7.1	4.5

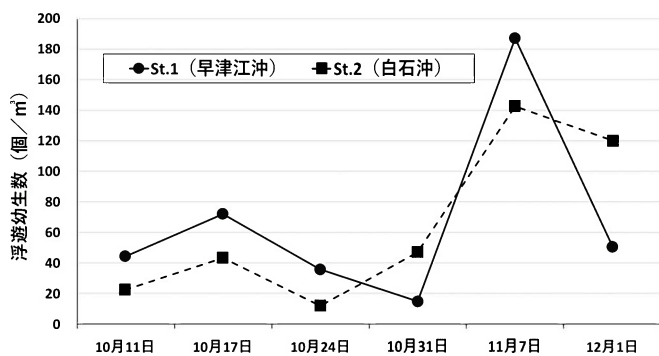


図2 調査定点別ウミタケ浮遊幼生の出現
個体数の推移

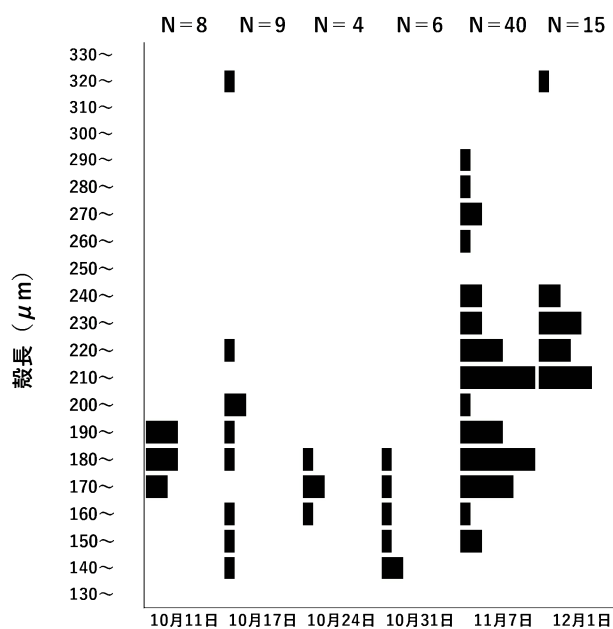


図3 ウミタケ浮遊幼生の殻長頻度組成の推移